

# 埼玉県

## 街道 1

埼玉県を代表する街道遺産は、鎌倉街道上道の遺構群である。鎌倉街道は栃木から神奈川まで関東一円に残っているが、埼玉県内に最も多く残っている。特に、山林内では堀割状の道路痕跡として良好な形で保存されている。ただし、現存するすべての鎌倉街道上道は何れも「推定」であり、トレンチ調査が行われた場所もあるが、その結果も、「鎌倉街道ではない」ことを証明することはできても、「鎌倉街道」だと断定することはできないので、本データベースではすべて「鎌倉街道上道（推定ルート）」と表記している。A ランク以上のものだけでも、大類と市場境界の鎌倉街道上道（毛呂山町）**A**、伊勢根の鎌倉街道上道（小川町、町史跡）**A**、大類と川角境界の鎌倉街道上道（毛呂山町）**A**、狭山市・所沢市境界の鎌倉街道堀兼道二本並行道（狭山市・所沢市）**A**、長久寺西～新光寺門前の鎌倉街道上道（所沢市）**A**、市場・西大久保境界の鎌倉街道上道（毛呂山町）**A**、将軍沢の鎌倉街道上道（嵐山町、町史跡）**A**と多数



推定  
遺・鎌倉街道上道(埼玉県)  
撮影:馬場俊介(2009.6.16)



にのぼる（年代はいずれも「鎌倉時代?」と表記）。写真では、現役の道路で雰囲気が残る「大類と市場境界の鎌倉街道上道」（左下〔上〕）と、山中の遺構で掘割が良く残る「伊勢根の鎌倉街道上道」を示した（左下〔下〕）。

## 街道 2

埼玉を代表する二つ目の街道遺産は、石尊常夜灯である。三重の太神宮常夜灯や愛知の秋葉山常夜灯のように大規模なものはほとんどないが、関東総鎮護である大山阿夫利神社の講中により雨乞い祈願を目的として建立され、大山への道しるべも兼ねているとされる。代表的存在は、高さ 4.27m の上富の石尊常夜灯（三芳町、天保 4（1833））**A** である。

## 街道 3

鎌倉街道上道と並び、埼玉県を代表する街道遺産は、全国最多の道標群である。本データベースに登録されている道標の件数は 1416 基で全国 2 位の千葉県の 854 基を遥かに上まわる。しかも、千葉県では既に述べたように県内の道標は徹底的に調査されているためこれ以上増える余地はないが、埼玉県の場合は、データの把握率が低い市・町があり、あと 1~2 割は増える可能性がある。道標が、埼玉県にこれだけ多い理由は、東半分が平坦な関東平野に位置し、町や村が 2 次元的に分布していたため、道しるべの必要性が高かったためだと考えられる。一方、東京都は一見多そうに思われるが、江戸の中心市街に入ると、そこが終着地であることから道標は不要とされた。

また、埼玉の道標の特徴として（千葉・東京とも似ているが）、兼用道標がほとんどを占めている。すなわち、青面金剛（最多）、各種の観音（馬頭観音と地藏で 9 割）、不動明王、弁財天、大黒天などを祀った石碑、あるいは、「庚申」「南無阿弥陀佛」「二十三夜」などを刻んだ文字碑、秩父・坂東などの巡礼供養碑、の側面や台石に道しるべが刻字されている。像容は、千葉と比べて庚申講に関わる比率が高く、馬頭観音の比率が低いことと、バラエティがより大きくなっているのが特徴である。それぞれの像容の



代表は、三室の庚申塔道標（さいたま市緑区、寛保 2（1742）、

高 695 cmは、道標を含めた全石碑の中で全国一の大きさを誇る。

市有形民俗 **A** と久下の不動明王像道標（熊谷市、慶応 3（1867） **A** と田島の弁財天像道標（さいたま市桜区、正徳 3（1713） **A** と三ツ木の馬頭観音像道標（鶴ヶ島市、寛政 8（1796） **A** と中奈良の如意輪観音像道標（熊谷市、宝暦 8（1758） **A** と高尾の地藏道標（北本市、享保 14（1729） **A** である。上の写真には、特に珍しい最初の 3 点を示す。すなわち、青面金剛に四夜叉を付した国内唯一の事例、不動明王に脇童子を付した国内 2 例のうちの一つ、弁才天像を彫った国内唯一の事例である。

## 舟運 1

埼玉の舟運で特筆すべきことは、木樋としては全国最古の運河開門である見沼通船堀の東縁一の関・二の関、西縁一の関（さいたま市緑区、享保 16（1731）、国史跡） **A** の 3 つの開門が見られる点である。国内最古の岡山県の吉井水門と違い木製なので、一時は腐食・滅失していたが、平成 6～9 にかけて再現された。

## 街道 4

街道の最後は、石橋供養塔と敷石供養塔である。石造物の施工に関する供養塔の存在は、関東地方特有の事象であるが、埼玉県にはとりわけ数多く存在し、石橋供養塔が 267 基、敷石供養塔が 81 基に達する。

石材を簡単に入手できた西日本では、石橋が多く残るが石橋供養塔はない。逆に、石橋がほとんど現存していない埼玉で石橋供養塔のみが沢山残るという逆転現象は面白い。両供養塔の中で最大のもは、不動岡の敷石供養塔（加須市、元文（1739） **A** で、総



## 舟運 2

埼玉における河川舟運の中心は、江戸川・中川・荒川・新河岸川などで、それらの川沿いには江戸への舟運の基地として多くの河岸が設けられた。しかし、現在その位置は特定できても、関連する施設が

残っていることは稀で、最良の事例でも石雁木が残る札幌河岸・跡（草加市、江戸期）**B** 程度である。また、平方の石祠（上尾市、享保 2（1717）、市有形）**B** は荒川舟運で発達した平方の河岸場の隆盛を伝える歴史資料という意味で、重要な舟運遺産である。

## 農業 1

埼玉には、江戸期を代表する二大用水・葛西用水（万治 3（1660））**A** と見沼代用水（享保 13（1728））**A** が流れている（ともに、総延長約 70 キロ）。前者は、徳川幕府の天領開発策の一貫（幸手領の用水路）として、関東郡代・伊奈忠克により開削されたもの、後者は、八代将軍・吉宗の命を受け、井澤弥惣兵衛為永により開削されたものである。いずれも現役だが、護岸はコンクリート化されている。

溜井は、用水と溜池が合体した関東独自の貯留施設で、原形を最も留めた瓦曾根溜井（越谷市、慶長年間（1600 頃））**A** は、幕府が八条領と四ヶ村（瓦曾根・西方・登戸・蒲生）の水田の灌漑に利用するため、荒川の流れを堰き止めたものである。



## 農業 2

幕府勘定方・井澤弥惣兵衛為永によって開かれた笠原沼新田では、かつて低湿地でよく見られた楕形の堀上田（宮代町、享保 13（1728）以降）**A** が県下で唯一残っている。こうした水田は、保存する強い意志がないと、知らない間に消えていってしまうので、宮代町が「県下唯一」という認識を持っている点は重要である。実際、全国の干拓地でよく見られたこうした水田は、今では全く姿を消してしまい、「県下」ではなく「国内唯一」だと思われる。



## 防災 1

関東平野はかつて洪水の常襲地帯であり、人口増に伴い、水害対策が重要な課題となった。利根川治水で最重要施設とされるのは、権現堂堤（幸手市、天正 2（1574）か天正 4（1576））**A** と、中条堤（行田市・熊谷市、慶長年間（1610 年頃））**A** である。



これ以外に、久下の長土手（熊谷市、天正 2（1574））**A**、古隅田川の旧堤（春日部市、江戸期）**A**、吉見領困堤（吉見町、元和年間（1620 前後））**A**、趣向は異なるが、末田須賀堰の御定杭（さいたま市岩槻区、寛延 3（1750））**A** も第一級の治水遺産である。